

## おはよう

[マタイによる福音書 28 章 1～15 節]

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、言った。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。

[1] 「おはよう」と語りかける主

おはようございます！復活節・イースターの朝をご一緒に迎えることが出来て感謝致します。今私は「おはようございます」と挨拶しましたがけれども、今日の聖書の箇所をお読みになってお気づきになったのでしょうか？ マタイによる福音書では、死から甦られた主イエス様が最初に発せられた言葉がまさに「おはよう」なのです。8～9節をもう一度読んでみます。—「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。」—イエス様ご自身がこの婦人たちを待ち受け、イ

イエス様の方から声をかけられたというのですね。何と心に染みるような場面、また挨拶の言葉でしょうか！ 私は今日、復活日・イースターの宣教はこのイエス様の一言をご一緒に味わえばそれで十分ではないかと思いました。

それで久しぶりに、昨日こんな詩を作ってみました。下手な詩ですが。

「おはよう」

まさかこのことばをもう一度聞くことが出来るなんて。

おはよう。

永久（とわ）の別れとは、あいさつが失われること、

わたしを呼んでくれる声が聞こえなくなること。

わたしの呼ぶ声が風の中に消えてしまうこと。

あなたとわたしの時間が古ぼけた写真のように封印されてしまうこと。

そこに、あいさつが戻ってきた。

おはよう。

ここにあるのは、新しく始まる時間の創造—わたしとあなたの。

わが時は、あなたの手の中にあり。

開かれた墓に光が差し込み、

永久（とわ）に続く新しい日常が、死んでいた私を呼ぶ声から始まる。

わたしも応える。—おはよう。

## [2] 確かに、あなたがたに伝えた

マタイによる福音書は、イエス・キリストの復活を描く時、復活の主が天からの輝く栄光と力を帯びてやってくるという目を見張るようなことでなく、「おはよう」という挨拶と共に、**私たちとイエス様との関りの回復がそこに起こる**ということを語っています。そこにあるのは、**私たちの不信仰も、裏切りも、弱さも、イエス様は何もかもご存じの上で、受け容れておられる**ということです。イエス様の「復活」の意味の大切な一つはそこにあると思います。「十字架」というのは、ある意味私たちへの「裁き」でもあるのです。しかし、十字架で終わらなかつた。「おはよう」と言って戻って来られた。しかも罪人である私たち目がけてです。ここには「赦し」がありますし、私たちを誰一人失うまいとする「愛」があります。

私は今日の聖書の箇所「何故こんなことを言うのだろうか」と思った言葉がありました。天使の言葉で、7節の「**確かに、あなたがたに伝えました**」です。これが無くても意味は通じますよね。でも思いました。これは**天使の保証**なのだと。「**間違いのないこと**として、御使いである私が語る。**これは本当のことなのですよ**」とお墨付きですね。…考えてみて下さい。私たちは自分の内側を見ても救いの確か

さは無いのです。ましてや「復活」の確証のようなもの、それは、神様から“与えられる”ものなのですね。辻褃合わせは信仰ではありません。今日の箇所でも、祭司長や長老たちは番兵を丸め込んで辻褃合わせをしようとしていますね。信仰とはそれと全く違うということを告げているのではないのでしょうか。「あるがまま」の私で良いのです。「私はあやふやな信仰しか持てなくて」とおっしゃるかもしれません。でも、それで良いのです。自己確信が信仰ではありません。神の言葉、御言葉に自分をあずけることが信仰です。今日から始まる川越教会の今年度の聖句（週報掲載）も是非覚えて頂きたいと思います。—「あなたはわたしの隠れが、わたしの盾。御言葉をわたしは待ち望みます」（詩編 119:114）。

### [3] 新たに生きるための「復活」

弟子たちと復活のイエス様との出会いは 16 節以下ですので、それは来週取り上げます。そこでは「遣わされる」ということがテーマになるかと思いますが、よく弟子たちは全く生まれ変わったという言い方がされ、確かにそう言っても誤りではないと思いますが、注意したいと思ったのは、別人になったという訳でないということです。そこでも大事なことは「おはよう」ということです。イエス様の呼びかけに応え、生きて来た日常（その原点はガリラヤだった）が、復活の主に出会うことによって、更に深められたということではないかと思います。弟子たちはその出会いの原点であるガリラヤで再び主とまみえるのです。

一つの映画の話をしたと思うのですが、それは 1996 年に起こった、北アフリカのアルジェリアの田舎にあるフランス人のトラピスト派の修道士たち 7 人が、当時のテロリストたちに拉致され殺害された事件を基にして作られた『神々と男たち』という映画です。2010 年制作でカンヌ映画祭でグランプリを獲得した素晴らしい映画です。修道士たちの表情がとても良いです。レンタルも出来ます。

修道士たちは村人と共に働いたり、その中の一人は医師でもあるのでそこで診療所を開いたりして、村人たちととても良い関わりを作っていたのですが、すぐ近くで外国人たちが殺される事件がおこり、内戦が激しくなり、そこで彼らは板挟みに遭います。フランス政府は帰国せよと言います。しかしそうすると信頼してくれているアルジェリアの人々を捨てることになる。修道会を軍隊の保護下におくことも信仰的に考えられない。修道長は、一人ひとりが良く考えて決断して欲しいと言います。その中で政務日課一聖書を読み、黙想し、皆で聖歌を歌うこと一を一日に何度も繰り返し、また労働し、また隠れながら、テロリストと思われる人々にも医療行為を行うのです。…しかし環境はどんどん厳しくなり、実は、拉致されてしまう前日に、手に入ったワインを皆で分け合い、或る者は涙

を流し、或る者は静かに微笑みながら晩餐式を行うのです。葛藤の末に彼らの心は一つになったのです。その前、グレゴリオ聖歌が歌われます。こういう歌です。

「忍耐をあの御方へ向けよう 苦しむ御方の元へ行こう 十字架の上で 印を示された主の元へ 復活の日の暁のように 私たちと共にあるから あの御方を見失うことはない

流れ落ちる血と パンを分かち合おう めぐり来る聖杯から飲もう 自ら犠牲となった あの御方を迎えよう 最後の時まで 私たちを愛したあの御方を」

「父よ 光の父 とこしえの光 あらゆる光の源

主は神々しい 御顔の輝きによって 夜の入口で 私たちを照らす

主において 闇は 闇ではなく 主において 夜は 昼のごとく明るい

願わくば 主の御前で祈る 私たちの祈りが 香が立ち昇るように 高く昇りますよう 私たちの手が夕べの供物でありますように」

そして、この修道長・クリスチャンは、その直前の場面でイエスの受肉が分かったと語るのです。こう語ります。—「キリストは私たちをどこへ導いているのか。人は生まれて、また生まれる。受肉とはイエスの神の子としての現実を、人の中に受けることだ。その神秘は、私たちが生きることにある。今まで生きてきたこと、そして、さらに生き続けるということだ。」

これは凄い言葉だと思います。「人は生まれて、また生まれる」。毎日の日常が死であり、また甦りだということです。「今まで生きてきたこと、そしてさらに生き続けるということだ」。ですから、「おはよう」なのです。イエス様のこの「おはよう」は、日常語なのです（「カイレテ」）。「やあ」とか「ごきげんよう」といった言葉で、原意は「心が晴れやかであるように」という意味の、実に平和で穏やかな「呼びかけ」なのです。あなたは、恐れや、後悔や、後ろめたい思いを何ら持たないで、私の光の中を歩んでいらっしやい、と。

今日はイースター。サタンの力を自ら打ち破られたお方が、この朝「おはよう！」と私たちに呼びかけています。天使は言いました。「この方はあなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」。この復活の主とまみえる所は、それは死んだ後ということも勿論あるでしょうけれども、**私たちの現場**です。あの修道長が語ったように、「人は生まれて、また生まれる」。今日、キリストの命を私たちの中に頂いて、「おはよう」と言われるイエス様に、私たちも「おはよう」とお応えしながらこの日常を歩んで行く勇気を頂きましょう。**私たちの「時」は、神様の「手」の中に完全にあるのですから**。主のご復活、おめでとうございませう！お祈りを致します。